



尾高惇忠は天保元（1830）年下手計村に生まれました。通称新五郎、諱は惇忠、藍香と号しました。

渋沢栄一の従兄にあたり、栄一は少年時代からこの藍香のもとに通い、論語をはじめ多くの学問を藍香に師事したことが知られています。後世、“藍香ありてこそ栄一あり”と称えられた人物で、知行合一の水戸学に精通し、栄一の人生に大きな影響を与えました。

明治時代を迎えると、惇忠は富岡製糸場初代場長や第一国立銀行の盛岡支店長や仙台支店長などを務め、幅広く活躍しました。

この尾高惇忠生家は江戸時代後期に惇忠の曾祖父磯五郎が建てたものと伝わっています。「油屋」の屋号で呼ばれ、この地方の商家建物の趣を残す貴重な建造物です。この家で栄一の妻となった千代、見立養子となった平九郎、惇忠の娘で富岡製糸場伝習工女第一号となるゆうが育ちました。また、若き日に惇忠や栄一らが尊王攘夷思想に共鳴し、高崎城乗っ取り・横浜外国商館焼き討ちの謀議をなしたのもこの家の2階と伝わります。

内庭の煉瓦倉庫は、「上敷免製」の刻印を残す煉瓦が周囲に残ることから日本煉瓦製造株式会社製の煉瓦で建てられたものと思われる。

平成 22（2010）年に深谷市指定文化財（史跡）となりました。



密議をしたと伝わる2階の部屋（非公開）

煉瓦造土蔵



煉瓦土蔵の周辺で発見された煉瓦。「上敷免製」の刻印があり、日本煉瓦製造株式会社の煉瓦であることがわかります。



橋氏を祖とす

尾高 勝右衛門



尾高惇忠（藍香）
渋沢栄一の学問の師
従兄・義兄
官営富岡製糸場初代場長



尾高（渋沢）千代
渋沢栄一と結婚



尾高惇忠が初代場長を務めた
官営富岡製糸場（画像提供 富岡市）

尾高磯五郎
文化4(1807)年
没48才
尾高勝右衛門
二男

磯五郎重孝
元治元(1864)
年没82才
磯五郎子なく美
兄傳蔵の子磯八
を嗣となし、後、
改めて磯五郎と
なる。天保10
(1839)年名主と
なる

勝五郎保孝
安政5(1858)年没56才
重孝長男名主

妻やへ
血洗島村
渋沢政徳女
明治元(1868)年没62才

惇忠(保孝長男)
天保元(1830)年生
明治34(1901)年没72才
明治21(1888)年東京より
転籍し戸主となる

妻き世
明治8(1875)年没40才
児玉郡猪俣村 根岸幸平女

継妻よし
明治43(1910)年没76才子なし

みち
大川修三に嫁ぐ

こう(幸子)
岡部氏に嫁ぐ

長七郎
明治元(1868)年没31才

千代
明治15(1882)年没42才
渋沢栄一に嫁ぐ

くに
明治39(1906)年没63才
尾高幸五郎に嫁ぐ

平九郎
渋沢栄一の養子となる
明治元(1868)年5/23戦死22才

勝五郎保志
32才没

鐵之助 早世

妻 婦美
明治24(1891)年離縁

ゆう
万延元(1860)年生
大正12(1923)年没64才
永田清三郎に嫁ぐ

ノブ
明治19(1886)年没
木村清夫に嫁ぐ

トヨ
大正9(1920)年没56才
朝山義六に嫁ぐ

次郎勝忠
慶應2(1866)年生
大正9(1920)年2月4日没55才

イキ
昭和4(1929)年没62才
斎藤精一に嫁ぐ

コト
明治38(1905)年没33才
青木定四郎を迎えて家を継ぐ

定四郎
明治3(1870)年生奈良村

定四郎継妻 子力
明治8(1875)年生
明覚村 小室氏



尾高ゆう
日本初の製糸工女と
なる(満12才で官営富
岡製糸場の第1号で
第1等の伝習工女)

浩一
明治32(1899)年生
1978年没

せつ
1900生 1984年没

惇二
明治34(1901)年生
昭和14(1939)年没

格三
明治36(1903)年生

フサ
明治38(1905)年生
名達隆義に嫁ぐ



密議のようす「暴挙計画」



尾高家の鬼瓦
「入り山二」の印は当時菜種
油等の商いをしていた尾高
家の商標。

富岡製糸場図大絵馬

葦塚直次郎が深谷市田谷にある永明稲荷神社に奉納した絵馬（深谷市指定文化財）



鹿島神社と藍香尾高翁頌徳碑

鹿島神社は旧下手計村の鎮守です。神社の境内には、尾高惇忠の功績を称えた藍香尾高翁頌徳碑（深谷市指定文化財）があります。題額は徳川慶喜の揮毫。

